

パイレーツ・オブ・カリビアン／デッドマンズ・チェスト

2006(平成18)年7月5日鑑賞<試写会・梅田ピカデリー>

★★★★



監督＝ゴア・ヴァービンスキー／出演＝ジョニー・デップ／オーランド・ブルーム／キラ・ナイトレイ／ステラン・スカルスゲールド／ビル・ナイ／ジャック・ダヴェンポート／ジョナサン・ブライス／ナオミ・ハリス／トム・ホランダー（ブエナ ビスタ インターナショナル（ジャパン）配給／2006年アメリカ映画／約150分）

……今年の夏は2003年に続いて、パイレーツ（海賊）が劇場をジャック！
 思わずそんな予測をするほどの楽しい大活劇に大満足……。『契約』概念が大切なことは前作と同じで、“深海の悪霊” デイヴィ・ジョーンズから『契約』違反を追及された、キャプテン・ジャック・スパロウが目指すものは……？ “深海の悪霊” と “深海の魔物” の襲撃に耐えきれず、ジャック船長はブラックパール号とともに、海の藻屑と消えてしまうのだろうか……？
 いや、そうなったのでは、2007年5月公開の第3作が成り立たない。すると、ジャックはやはり不死身……？

『パイレーツ・オブ・カリビアン』全3部作の誕生秘話……？

この『パイレーツ・オブ・カリビアン／デッドマンズ・チェスト』は、前作『パイレーツ・オブ・カリビアン』（03年）に続く第2弾だが、この製作についての第1原則は、前作のスタッフとキャストを再結集すること。そして第2の原則は、何と第3弾完結編を同時に撮影すること。しかして、今年7月の第2弾公開と同時に、第3弾完結編を2007年5月に公開することも決定されたとのこと。前作も2時間23分と長かったが、第2部も約2時間30分と長編。しかし前作と同じく、決して観客を飽きさせることのない痛快活劇はお見事。

ここで難しいのは、第3作へのつなぎ方。そのテクニクを読みとるための条件は、エンドロールが流れ終わるまで絶対に席を立たないこと。すなわち、『X-

MEN：ファイナル ディシジョン』(06年)と同じように、エンドロールの後、再びスクリーンに登場する1シーンを絶対に見逃してはダメ。さて、ここに登場する人物は果たしてダレ……？

前作以降の3人の主役の成長と活躍に注目！

前作『パイレーツ・オブ・カリビアン』についての私の採点は最上級の5点(『シネマルーム3』101頁参照)。

その評論で私は、1枚の金貨を巡る痛快活劇の面白さを絶賛するとともに、①正統派主人公ウィル・ターナー、②行動派の美女エリザベス・スワン、③魅力あるキャプテン、ジャック・スパロウについてコメントした。そしてこの私のコメントどおり、この主役3人のその後の成長と活躍にはめざましいものが……。私が観た映画だけでもそれはすごいもの。

まずウィル・ターナーに扮するオーランド・ブルームは、『トロイ』(04年)(『シネマルーム4』59頁参照)と『キングダム・オブ・ヘブン』(05年)(『シネマルーム7』34頁参照)という2つの歴史大作で実に堂々とした演技を披露し、今やハリウッドの大スターに成長。エリザベス・スワンを演ずるキアラ・ナイトレイは、『キング・アーサー』(04年)(『シネマルーム6』117頁)でのお姫様役や、『DOMINO』(05年)(『シネマルーム9』216頁参照)の主演と続き、きわめつけは『プライドと偏見』(05年)(『シネマルーム10』198頁参照)。この作品で彼女は、その輝くような美しさとすばらしい演技力でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされるまでに成長。

そしてジャック・スパロウ役ジョニー・デップに至っては『チャーリーとチョコレート工場』(05年)(『シネマルーム9』112頁参照)、『ティム・バートンのコープス プライド』(05年)(『シネマルーム9』102頁参照)、そして『リバティーン』(05年)(『シネマルーム10』308頁参照)とその八面六臂の活躍ぶりには唖然とするばかり……。

『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズが大成功するであろう原因の第1は、こんな3人の主役の組み合わせがベストだったこと。2007年5月の最終章公開に至るまでの3人のさらなる成長と活躍に注目したいものだ。

まずは第1作の復習から……

本当はあまり難しいことは言いたくないのだが、第2作目を十分に楽しむためには、やはり前作のストーリーを復習しておくことが大切。ここではそれは書かないが、そのためにはパンフレットを読むもよし、私の評論を読むのもよし……。もっとも、ストーリーの復習だけならパンフレットを読むだけで十分だが、次の3点の「勉強」には私の評論の復習が不可欠。すなわち、

- ①本作でも再三登場し、重要なテーマとなる「取引」というものの勉強。
- ②海賊モノ、とりわけカリブ海海賊モノを理解するための前提としての15世紀末から16世紀始めにかけての大航海時代の勉強。
- ③スペインに対抗するべく、力をつけてきたイギリスが海賊に対して与えた「免許状」の歴史的意義。

さあ、これだけの復習を踏まえてこの痛快活劇に挑めば、あなたは完璧。ポップコーンをボリボリ食べながら、などという行儀の悪いことをせず、しっかりとスクリーンに集中してその大活劇を楽しもう……。

第2作の「統一テーマ」はデッドマンズ・チェスト

前作のテーマは「1枚の金貨」だったが、第2作の統一テーマは「デッドマンズ・チェスト（死者の宝箱）」。このデッドマンズ・チェストの中に入っているのは、デイヴィ・ジョーンズ（ビル・ナイ）の心臓。かつて偉大なる水夫だった彼は恋に破れ、その耐え切れぬほどの痛みに、心を切り取ってチェストに封印したのだった。そしてその鍵は、デイヴィ・ジョーンズが自分自身の首にかけて片時も肌身離さずに……。

第2作のストーリーは、この鍵と「デッドマンズ・チェスト」の争奪戦がメイン。さて、このデッドマンズ・チェストはどこに隠されているのだろうか……？ それを開けるため、誰がどのようにしてデイヴィ・ジョーンズから鍵を奪うのだろうか……？ また、このデッドマンズ・チェストの中から心臓を奪うことに、何の意味があるのだろうか……？ そういう興味で観客の目をスクリーンに釘付けにするためには、さまざまな前提事実の理解が必要だし、複雑に錯綜する人間

関係(?)の理解も必要。

そこで以下、この痛快活劇を理解するための必要最低限のポイントだけ紹介しておこう。なお、「北を指さない羅針盤」「東インド貿易会社」「『P』の焼印」や「ブラックパール号」と「フライング・ダッチマン号」との曰く因縁、さらに「深海の魔物」クラークンの解説などは、各自パンフレットを読んで学習してもらいたい。

ポイントその1——ジャックとデイヴィ・ジョーンズとの契約は……？

この第2作ではジャックが何者かに脅える姿が印象的(?)だが、それはジャックが自分の魂と引き換えにデイヴィ・ジョーンズとの間で交わした契約によるもの。すなわち、その契約とは、ジャックがブラックパール号の船長として13年間過ごした後は、デイヴィ・ジョーンズのフライング・ダッチマン号で永遠の労役に服するというもの。そして、遂にその13年間の期限が到来したため、デイヴィ・ジョーンズがその契約の履行をジャックに迫っているわけだ。

また、物語が進行する中で明らかになるのは、深海の悪霊デイヴィ・ジョーンズは、フライング・ダッチマン号の乗組員たちにも100年間の労役に服するという「契約」をさせているということ。100年間も海の底に潜ってフライング・ダッチマン号で仕事をしていれば、デイヴィ・ジョーンズはもちろん、フライング・ダッチマン号の乗組員たちの顔は、まるで深海に住む魚や貝そのもの。その面白い顔つきは、一見の価値あり……。

ポイントその2——ウィルとエリザベスの結婚はお預け……？

好き合った美男美女同士があっさり結婚してしまったのでは、ストーリーに面白みがなくなってしまう。そこでゴア・ヴァービンスキー監督は、まずはこの2人の仲を裂き、結婚式をお預けとした……？ もっとも、現実に結婚式の当日、ウィルとエリザベスへの逮捕状を執行するのは、東インド貿易会社のベケット卿(トム・ホルンダー)。そしてその罪状は、前作においてキャプテン・ジャック・スパロウを逃がそうとした罪……？

しかしここでも、「契約社会イギリス」らしく、ベケット卿はジャックの持つ

「北を指さない羅針盤」を取得することと引き換えにウィルを釈放したうえ、さまざまな取引条件を提示。さらにエリザベスも、父親のスワン総督（ジョナサン・プライス）の手引きで脱獄を成功させたうえ、とても貴族の令嬢とは思えないような「パイレーツ的才覚」で、ウィルとジャックを追うことに……。しかし、こんな冒険続きの旅を続ける2人は、一体いつになったら無事に挙式できるのだろうか……？

ポイントその3——エリザベスとジャックは似た者同士……？

前作でも少し怪しかったのは、総督の娘エリザベスは美しい貴族令嬢ながら、実はパイレーツ魂を持った女性であるため、何よりも束縛を嫌い自由を愛するジャックと似た者同士ではないかということ……。第2作ではその傾向がますます強くなり、エリザベスの「本命クン」がウィルではなく、ひょっとしてジャックでは、と思わせるような状況も……。姿カタチや若さで見れば断然ウィルがオススメだが、ジャックだって愛嬌があるだけではなく、実は善人……。そんな風にジャックの性格分析に精を出しつつ、エリザベスとジャックとの距離が急速に近づいていく姿に注目！

もっとも、「デッドマンズ・チェスト」を無事手に入れた(?)ジャックやエリザベスとウィルたちが乗るブラックパール号が、遂にデイヴィ・ジョーンズの乗るフライング・ダッチマン号と深海の魔物クラークンに襲われ、いよいよジャックの最期かという時に見せたエリザベスのお手並みは、ジャックを凌ぐ女パイレーツの鮮やかさ……。やはり女はコワイ……。これによって、キャプテン・ジャック・スパロウは愛するブラックパール号とともに海の藻屑と消え、物語は「ジ・エンド」となるはずだったが……？

ポイントその4——父と息子との絆が復活……。？

契約の履行を迫るデイヴィ・ジョーンズの使者としてジャックの元を訪れたのは、今や顔の一部が深海の生物と化したジャックの旧友であるビル・ターナー（ステラン・スカルスゲールド）。ちなみに、彼がウィルの父親であることは前作で明らかにされているとおり……。

本来ならウィル・ターナーとビル・ターナーとの接点はありませんが、ウィルがジャックの持つ羅針盤を求める冒険の旅に出たため、思いがけない場所で「親子のご対面」が実現。日々危険な状況下で生き抜いている父親と、自分の力を信じ目的を達成することによってエリザベスとの結婚を目指している息子との絆は、以降急速に強まっていくことに。したがって、第2作では、この親子の絆の復活も大きなポイント。

その他のポイントあれこれ

その他のポイントは第1に、「デッドマンズ・チェスト」捜しの旅の中でくり広げられるドタバタ劇の面白さ。超一流の役者が、きっちりと計算し尽くされた演出の下で大活劇を展開するのだから、そりゃ面白いのが当たり前……。

第2は、そのドタバタ劇に元エリザベスの婚約者で、提督の地位を追われたノリントン（ジャック・ダヴェンポート）が登場し、三つ巴から四つ巴の決闘をくり広げること。

第3は、『ダイヤモンド・イン・パラダイス』（04年）で、すばらしい肢体を披露したナオミ・ハリス扮するティア・ダルマが、ヴェドゥ教の予言者として怪しげな雰囲気が登場し、重要な役割を果たすこと。

そして第4は、CGやVFXをふんだんに使った視覚効果のすばらしさと、パイレーツ映画にふさわしいズクズクするような音楽の躍動感のすばらしさ。その他のポイントもあれこれあるが、もうこれくらいで十分だろう。あとは理屈抜きで、タップリと映画を楽しむだけ……。

2006(平成18)年7月6日記